

## 文形成の深層・中国語の文形成（二）

馮 蘊 澤

### 3. 意味単位としての文とその構成成分（承前）

#### 3.1 意味単位、意味成分、意味成分の意味機能

前編（「文形成の深層・中国語の文形成（一）」）では、伝統文法が提唱する「統語成分」の概念の表層性、及び文形成メカニズムの説明における非有効性について次のように述べてきた。

「統語成分」は文の最も表層の形式を対象とした分析によって得られる構成成分である。統語成分が持っていると思われる「位置の情報」と「意味機能の情報」の対応関係は文によって、必ずしも同じではないという、1対多数の非対称性の対応関係であることから、両者は表裏一体的な存在ではなく、位置の情報の担い手と意味機能の情報の担い手は別々であり、互いに独立した階層を成しているものと考えられる。文形成に当たって、位置情報の担い手と意味機能情報の担い手が結合し、その都度、その文ならではの「統語成分」が形成されるのである。つまり、統語成分とは、位置情報の担い手と意味機能情報の担い手が結合して、文が形成される度に形成される二次的産物で、表層の現象ある。位置情報の担い手と意味機能情報は文によって対応関係が異なるという非対称性対応関係にある、そのため、表層の「統語成分」における位置情報と意味機能情報の対応関係も文によって常に同じとは限らない理由である。従って、文形成のメカニズムの解明には少なくとも、①位置情報の担い手（形式成分）及び形式の構造、②意味機能情報の担い手（意味成分）及び意味の構造、さらに③位置情報の担い手（形式成分）と意味機能情報の担い手（意味成分）の対応関係という3つの課題があるこ

とを示した。議論の都合上、②の「意味機能情報の担い手及びその構造」と③の位置情報の担い手と意味機能情報の担い手の対応関係について考える十分の紙幅はなかったため、ここでは改めてこれら2つの問題について取り上げることにする。

文は意味の面で見れば意味の単位である。意味単位としての文はその構成成分である「意味成分」に分析できる。意味成分はそれぞれ何らかの「意味機能」を持っており、意味成分はこうした意味機能の情報に基づいて分析される。例えば、10の語からなる次のa文はbように、6つの意味成分に分析される。

- (1) a. [张三] [在] [西单] [的] [菜市场] [市场] [卖] [了] [三年] [豆腐]。  
b. {张三} {在西单的菜市场} {卖} {了} {三年} {豆腐}。

このように、意味単位としての文はより小さい意味成分から構成されるので、構造があると考えられる。

意味成分は語やフレーズなど、何らかの言語学的単位によって担われる。意味成分は、それを担う言語学的単位が述詞（動詞、形容詞）であれ、名詞や副詞であれ、あるいは「項」（必需成分）であれ、「付加詞」（任意の成分）であれ、文全体の意味を構成するうえでいずれも何らかの意味機能を担っている。聞き手（及び読み手）がその文を構成するこれらすべての意味成分の意味機能を読み取り、理解することで、文の意味を理解するのである。上のb文を構成する6つの意味成分の文中で担う意味機能をそれぞれ次のように示すことができる。（〈 ― ・ ― 〉の中の後半部分は当該意味成分の下位類型を表す）。

- |         |           |
|---------|-----------|
| (2) {卖} | 〈事象・動作〉   |
| {了}     | 〈完了〉      |
| {张三}    | 〈主体・動作者〉  |
| {豆腐}    | 〈客体・被動作者〉 |

{西単的菜市場}            <場所>

{三年}                      <動量>

ちなみに、ここでいう「意味機能」とは、意味成分の担い手である語やフレーズ自身が持つ語彙的意味（あるいは辞書的意味）とは異なり、語やフレーズが文の意味成分として採用され、その文の中の「事象成分」との間に新たに生じる意味関係のことで、いわば、その文ならではの「構文的意味」である。上記（1-b）文で用いられている「张三」という語の語彙的意味と、それが当該文中で担う意味機能をそれぞれ次のように述べることができる。

(3) 語彙的意味：人名、一般的に三男につけられる。

意味機能：<動作者>

このため、語彙的意味は文によって変わることはないのに対して、意味機能は文によって必ずしも常に同じであるとは限らない、むしろ異なるのが通常である。次の例は同じ一つの文の中でも意味成分の配置位置が異なれば意味機能も異なり(4)、また、配置位置が同じでも、文中の事象成分が異なれば意味機能も異なる(5)ことがあることを示している。

- (4) a. [张三] 推了一把李四。            张三：<動作者>  
       b. 李四推了一把 [张三]。            张三：<被動作者>

- (5) a. [张三] 推了一把李四。            张三：<動作者>  
       b. [张三] 有一辆跑车。            张三：<所有者>

従って、意味成分とは、より正確に言えば、「1つの意味機能の情報を担っている言語学的単位（語やフレーズ）」のことで、その分析も、いわゆる「ポーズや、

挿入成分の可否」を手掛かりとする「統語成分」の分析とは異なり、あくまで「意味機能」の情報を根拠とするものである。

## 3.2 意味成分の類型

ここまでのなかで示してきたように、意味成分には、〈動作〉、〈動作者〉、〈被動作者〉など、何らかの意味機能の情報を持っている。意味成分はこのような意味機能の情報によって特徴づけられ、類型を成している。意味成分の類型情報は意味単位としての文の形成、つまり文の意味的適格性を保障するうえで不可欠な情報であることは言うまでもなく、中国語のような、配置位置によって意味成分の類型が示される孤立型の言語では、意味成分の配置、つまり形式の形成にも機能する情報である。意味成分の類型について現在すでに多くのことが知られているが、ここではこれらのことも含めて、意味成分の体系についての本論の観点を整理しておく。

### 3.2.1 「事象成分」と「関連成分」

意味成分はまず、それを構成成分とする文の意味形成において果たす役割によって、大きく「事象成分」と「関連成分」の二大類に分けられると考えられている。

まず、「事象 (event)」の概念について、影山 1996の表述を借りれば、「外界における状態、出来事、あるいは行為」とされる。従って、「事象成分」とは、これらの「状態、出来事、あるいは行為」を表す意味成分のこととなる。意味単位としての文には最低限「事象成分」が一つ、意味上必ず存在する。次の例のなかの [ ] の部分はそれぞれの文の事象成分である。

(6) 张三 [推了] 一把李四。

张三 [有] 一辆跑车。

张三的老家 [在] 湖南。

他方、その他の成分とは、事象成分と何らかの意味関係で結ばれ、事象の成立に関係する諸成分のことで、いわば関連成分である（以下「関連成分」と呼ぶ）。意味単位としての文には、事象成分のほかに、最低限一つ以上の関連成分が意味上存在する。(6)各例のなかで、事象成分以外の成分はすべて関連成分である。

事象成分と関連成分とでは、まずその意味機能が生じるメカニズムに違いがある。

事象成分の意味機能はそれを担う言語学的単位（語やフレーズ）の語彙の意味を反映し、それ自身の語彙の意味範疇に制限される。例えば、上の(6)の各文中で事象成分を担う動詞「推」、「有」、「在」の語彙の意味範疇はそれぞれ「動作」、「所有」、「存在」である、このような語彙の意味を持つ動詞が文中で担う事象の類型もその語彙の意味類型と同様で、それぞれ<動作>、<所有>、<存在>である。このため、同じ言語学的単位によって担われる事象成分なら、その意味機能は文によって変わることはない。

対して、関連成分はいずれも事象成分と何らかの意味関係で結ばれており、その意味機能である<動作者>や<被動作者>というのも事象成分との意味関係を示すものである。従って、関連成分は事象成分との間で何らかの意味関係を持っていることで意味成分となり、その意味機能も事象成分との相対的意味関係において定義されるものである。このような意味において、関連成分の意味機能は事象成分によって「与えられるもの」であるとも言える。このため、上の(4)、(5)が示すように、意味成分を担う言語学的単位が同じであっても、配置位置が異なったり、また、事象成分との関係が異なったりすれば、意味成分としての類型も異なる。あるいは逆に、意味成分を担う言語学的単位が異なっても、事象成分との意味関係が同じであれば、同じ意味機能を担うということになる。

事象成分と関連成分の違いのもう一つは文形成における役割の違いである。上に述べた意味役割形成の違いから、意味単位としての文の成立において、事象成分の存在は第一で、決定的な条件である。事象成分の存在によって、他の成分が事象成分の間に意味関係が生じ、意味機能が与えられ、意味成分としての資格を

得るに至る。次の例のように、事象成分が存在しない（あるいはその存在が連想できない）言語学的単位の集合では、個々の語の意味機能も不明で、意味単位としての文にはならない。

(7) ?? 张三/一把/李四

従って、このような意味において、文は事象成分の存在をもって成立するといっても過言ではない。これまでは、文は意味の面では「意味の単位である」と述べてきたが、より厳密には、「何らかの事象を表す意味単位である」ということである。

このように、意味単位としての文を構成するさまざまな意味成分のなかで、事象成分は自立的で、支配的な存在であるのに対して、関連成分は非自立的で、事象成分に対して従属的、依存する立場にあるので、文を構成する意味成分には「主要成分」と「従属成分」の違いがあり、事象成分は主要成分で、関連成分は従属成分であると考えられている。

ここで留意すべきことの一つは、表層において意味成分が省略されることがあるということである。従属成分である関連成分はもちろんのこと、主要成分である事象成分も、文脈などの情報によってその存在が読み取れる場合、表層の形式上顕現されないことがある。

事象成分は通常述詞（動詞、形容詞）によって担われ、伝統文法がいう「述語」の位置に配置される。一方、次の各例のように、一見、事象成分を担う述詞、つまり「述語」が存在しないように見える文も存在する、そのため、伝統文法では文末の名詞成分を「述語」と解釈し、このような文もしばしば「名詞述語文」と呼ばれる。

(8) 今天星期三。

我今年十八岁。

老李北京人。

他一天一个鸡蛋。

このような「名詞述語文」の解釈は以下の2つの事実が無視されている。

一つは、上の各文は次のような述詞顕在文と同義文関係にあるということである。両者の形式上の違いは、後者には「是」、「吃」など、前者にない述詞によって担われ、「述語」として顕現している事象成分の存在である。

(9) 今天〔是〕星期三。

我今年〔是〕十八岁。

老李〔是〕北京人。

他一天〔吃〕一个鸡蛋。

従って、明らかに、前者は後者の省略形で、事象成分を担う述詞（及び述語）が省略されていることが分かる。

もう一つは、省略されている述詞（事象成分）は、一定の条件下では顕現させなければならないという事実である。文中に否定や限定など、副詞成分を必要とする場合、前者の「名詞述語文」では次の(10)のように、そのままの形では副詞の使用はできず(11)のように、省略していると思われる「述語」、つまり事象成分を担う述詞を顕現させなければならない。

(10) \*今天不星期三。

\*他今年不十八岁。

\*老李不北京人。

\*老李一天只一个鸡蛋。

(11) 今天不〔是〕星期三。

他今年不〔是〕十八岁。

老李不〔是〕北京人。

老李一天只〔吃〕一个鸡蛋。

これは、副詞が担う成分は述詞（動詞、形容詞）が担う成分を修飾、説明、制限するもので、そのため、述詞の省略は副詞不在の場合は許されるものの、副詞による修飾、説明、制限を必要とするときには、修飾、説明、制限を受ける述詞自身の顕現が義務的に要求されるからである。事象成分担う述詞の非顕現はあくまで表層形式上の現象で、事象成分は文の成立にとって不可欠な成分で、意味的には必ず存在する成分である。

事象成分を担う述詞の顕現と非顕現の事実は同時にまた、文の形式には、意味的に存在する意味成分がすべて顕現する「基本形」（あるいは「原型」）と、表層では一部の意味成分が非顕現（あるいは省略）となる「変異形」の違いがあることを示している。このため、文の記述においても、文には意味単位として側面と形式の側面があることとともに、形式にはさらに意味成分が原型のまますべて顕現される深層のレベルと、一部の意味成分が顕現されない表層のレベルの違いがあることを正しく認識し、記述はいずれを対象としているか、自他ともに明確にしておく必要がある。

### 3.2.2 関連成分の類型

関連成分とは事象成分以外の成分の総称のことで、それ自体にはまたく主体>や、<客体>、あるいは<着点>、<時間>、<場所>、<手段>など、さまざまな類型がある。

関連成分のなかで、事象成分が必ず要求する成分、つまり必需成分の一つとして、<主体>成分がある。<主体>成分とは、伝統文法の用語を借りれば、「陳述者」である事象成分の「陳述の対象」に相当する成分である。従属成分の中に、



その文の事象成分の種類の如何にかかわらず、最低限く主体＞成分が一つ、意味上存在する。つまり、事象の成立にとって、く主体＞は必需成分である。前掲「张三推了一把李四。」、「张三有一辆跑车。」、「张三在楼上。」などの例のなかで、文頭に配置されている「张三」はいずれも「陳述の対象」で、く主体＞成分である。

関連成分のなかで、事象成分の種類によってその実現が異なる（事象成分の種類と相補分布関係にある）ものがある。く主体＞成分はその一つである。これまで見てきた例からも分かるように、主体成分はその文の事象成分の種類によって実現は同じではない、例えば、動作事象の主体はく動作者＞、所有事象の主体はく所有者＞、所在事象の主体はく所在者＞のように。このようなことから、く主体＞成分にはさらに下位類型があり、しかも、これらの下位類型は事象成分の種類を条件に相補分布関係にあることが分かる。このような関係は音韻部門における「音素」と「異音」（条件異音）の関係、または形態部門における「形態素」と「異形態」の関係、さらに形式部門における「深層形式」と「表層形式」の関係と同じである。上位成分である主体と、その条件変異である下位類型の関係を、音韻論における/音素/とその〔異音〕（条件異音）の関係に見立てて整理して示すならば、次のようになる。

(12)

関連成分		事象成分	動作	所有	存在	使動	使成	・ ・
/主体/	[動作者]		○	—	—	—	—	・ ・ ・
	[所有者]		—	○	—	—	—	・ ・ ・
	[所在者]		—	—	○	—	—	・ ・ ・
	[使動者]		—	—	—	○	—	・ ・ ・
	[使成者]		—	—	—	—	○	・ ・ ・

従属成分のなかで、く客体＞成分もまた事象の種類によっては必ず要求する関連成分（つまり必需成分）の一つである。客体成分とは、主体が事象を通じて直接的または間接的に働きかけ、あるいは関係する対象のことである。前掲「张三

推了一把李四。]、「张三有一辆跑车。」、「张三在楼上。」の例のなかで、「目的語」の位置に配置されている「李四」、「跑车」、「楼上」はそれぞれの文の事象が関係する<客体>成分である。また、これらの例が示している事実で分かるように、客体成分も主体成分と同様で、事象の類型によって下位類型の実現が異なり、下位類型が互いに相補分布関係にある成分である。例えば、<動作>事象の客体は<被動作者>、<所有>事象の客体は<被所有者>、<所在>事象の客体は<所在>となっているように。そこで、上で示した主体成分の上位、下位類型の表示と同じように、<客体>成分についても、下位類型間の相補分布の関係を次のように整理して示すことができる。

(13)

事象成分		動作	所有	存在	...
関連成分					
/客体/	[被動作者]	○	—	—	...
	[被所有者]	—	○	—	...
	[所 在]	—	—	○	...
	...	...	...	...	...

以上、従属成分のなかで、事象成分にとって必需成分である主体成分と客体成分について見てきた。事象成分の類型によって必ず要求されるもう一つの必需成分に<着点>成分がある。<着点>とは、事象の働きによって、<主体>または<客体>に変位が生じ、変位の結果、最終的に到着する地点のことである。「他放在桌子上一本书。」、「我送给小李一张票。」、「他推进院子里一辆自行车。」、「他们送到机场几个客人。」などのような文における「桌子上」、「小李」、「院子里」は「着点」である。これらの文にある「放」、「送」、「推」のような事象は主体または客体成分の移動を伴うもので、主体、客体のほか、こうした着点成分も要求され、欠けると意味的完結性が損なわれる。

(14) ? 他放一本书。

他放 [在～] 一本书。

? 我送一张票。

我送 [给～] 一张票。

? 他推一辆自行车。

他推 [进～] 一辆自行车。

（なお、「着点成分」の前につく「在～、给～、进～、到～」のような要素については、本論はそれに後続する「着点成分」を担う名詞に付随して生起し、その成分の意味機能（すなわち意味成分類型）を示す前置詞的な役割を果たす要素であると解釈する立場である。詳細は第2部、「中国語の文形成」参照されたい。）

以上、関連成分の例として、事象成分の類型によって必需成分となる3つの成分について見てきた。これらの必需成分以外にも、任意の関連成分として、〈時間〉、〈場所〉、〈手段〉、〈相手〉、及び〈様態〉、〈頻度〉、〈程度〉、〈動量〉、〈結果〉など、さまざまあることが想定される、その一部として、次のようなものを挙げることができよう。

- |                  |        |
|------------------|--------|
| (15) 张三 [六点] 起床。 | ・・・時間  |
| 张三 [在菜市场] 卖豆腐。   | ・・・場所  |
| 张三 [用白醋] 做豆腐。    | ・・・手段  |
| 张三 [给李四] 打工。     | ・・・受益者 |
| 张三 [经常] 旷工。      | ・・・頻度  |
| 张三 [非常] 悠闲。      | ・・・程度  |
| 张三去过 [三次] 广州。    | ・・・動量  |
| 张三卖豆腐卖得 [很起劲]。   | ・・・様態  |

### 3.2.3 事象成分の下位類型

〈事象〉成分は上位の関連成分類型である〈主体〉、〈客体〉、〈着点〉、〈時間〉、〈場所〉、〈手段〉などと並んで、もっとも上位の意味成分類型の一つである。一方、これまでの議論のなかで、〈事象〉成分にはさらに「動作」や「所有」、「存在」などの下位類型があり、事象成分のこのような下位類型の違いに対応して、その従属成分である〈主体〉や〈客体〉の実現も異なるを見た。例えば、〈主体〉の実現については次の例が示すように、事象の下位類型が「動作」であれば、その〈主体〉は〈動作者〉となり、「保有」であれば、その〈主体〉は〈所在／所有者〉となる、そして「存在」であれば、その〈主体〉は〈所在者〉となるように、それぞれ異なる。(以下、〈上位類型・下位類型〉のように表示する。)

- (16) [张三] 卖苹果。                      ・ ・ ・ 〈動作〉 ・ 〈主体・動作者〉  
       [桌子上] 有一个苹果。              ・ ・ ・ 〈保有〉 ・ 〈主体・所在/所有者〉  
       [那个苹果] 在桌子上。              ・ ・ ・ 〈存在〉 ・ 〈主体・所在者〉

事象の下位類型の違いは〈客体〉の実現にも表れる。次の例が示すように、下位類型が「動作」の場合は客体の実現は〈対象者〉で、「保有」の場合は〈被所有者〉で、また「存在」の場合は〈所在〉となるように、実現がそれぞれ異なる。

- (17) 张三卖 [苹果]。                      ・ ・ ・ 〈動作〉 ・ 〈客体・被動作者〉  
       桌子上有一个 [苹果]。              ・ ・ ・ 〈保有〉 ・ 〈客体・所在者/被所有者〉  
       那个苹果在 [桌子上]。              ・ ・ ・ 〈存在〉 ・ 〈客体・所在〉

また、客体のなかで、事象成分によって、その下位類型がさらに下位の類型(再下位類型)に区別できるものがある。例えば、同じ「動作」事象でも、客体の実現によって、「動作」はさらに「働きかけ」、「移動」、「結果」の違いがある。

(18) 张三推了一把 [李四]。      ・ ・ ・ <動作・働きかけ>・<客体・被動作者>  
张三去 [健身房]。      ・ ・ ・ <動作・移動>・<客体・移動先>  
张三做 [饭]。      ・ ・ ・ <動作・結果>・<客体・結果物>

(19)

<b>&lt; 事象 &gt;</b>	動作：	働きかけ：推（车）、敲（鼓）、弹（琴）、…
		移動：来（北京）、去（深圳）、…
		結果：做（饭）、织（毛衣）、画（画儿）、烧（开水）、…
		… …
		… …
	保有：有、V着 <sup>(1)</sup>	
存在：在、V在 <sup>(2)</sup>		
使成 写完、建成、V在 <sup>(3)</sup> 、V到、…		
使動：让～V、叫～V、使～V、派～V、命令～V、…繁荣经济、		
… …		

事象類型の分析に当たって留意すべきことの一つに事象成分の担い手の問題が

ある。事象やその類型である〈動作〉や、〈動作者〉、〈被動作者〉などは抽象的な概念である。抽象的な概念である事象は語やフレーズなど、何らかの具体的な言語学的単位によって担われ、表示される。つまり、事象とそれを担う言語学的単位の関係は「表されるもの」と「表すもの」の関係である。事象成分は「動詞」(述詞)によって担われるものであると考えるのが一般的なようである。影山 1996も「動詞は事象を言語化するものである」と述べている。そのため、動詞の意味類型がイコール事象の類型とするのがある種の暗黙の了解のようであり、事象類型の分析はしばしば動詞類型の分析をもって代えられる傾向にある。現在の意味論分析などでは、動詞をそれが要求する「項」(「必需成分」)の数によって、1項動詞、2項動詞、3項動詞のように分類するのもこのような考え方に立脚するものである。ここでは、述詞の類型がイコール事象の類型ではないことを強調したい。事象成分は単独の述詞によって担われることもあれば、述詞+ $\alpha$ の場合もある、また、同じ述詞でも、文によって、常に同じ事象を担うとは限らないからである。

まず、述詞は事象の担い手になるが、事象の担い手はすべて単独の述詞とは限らない、「述詞+ $\alpha$ 」で事象成分を担う場合も少なくない。次の2文(20)、(21)のなかで、事象成分を担う言語単位の中にいずれも動詞「放」が含まれている、(20)は〈事象・動作〉であるのに対して、(21)は〈動作・保有〉である。

(20) 他放在桌子上一本书。(彼は机に本を一冊置いた。)

(21) 桌子上放着一本书。(机の上に本が一冊置いてある。)

(21)のような「V+着」文が(20)と違って、「保有」事象であることを示す事実として、このような文は(22)のように、典型的な「保有」事象の担い手である「有」を述語に持つ文と同義であることで裏付けられる。

- (22) 桌子上 [放着] 一本书。 = 桌子上 [有] 一本书。  
 墙上 [挂着] 一幅画儿。 = 墙上 [有] 一幅画儿。  
 门前 [停着] 一辆车。 = 门前 [有] 一辆车。  
 书包里 [装着] 几本书。 = 书包里 [有] 几本书。  
 他手里 [拿着] 一个杯子。 = 他手里 [有] 一个杯子。  
 台上 [坐着] 主席团。 = 台上 [有] 主席团。

（なお、「放着」を事象の担い手とする文と「有」を事象の担い手とする文の同義関係は、両文の〈主体〉成分と〈客体〉成分の下位類型が同じであること（〈主体・所在〉、〈客体・所在者〉）を観察することで確認できる。紙幅の関係で、詳細は省略とする。）

このように、述語に配置される意味成分に同じ動作動詞「放」が含まれているにも関わらず、(21)の事象類型が(20)と異なり、「保有」となっていることは、(21)には述詞の「放」のほかに、一般的に助詞と解釈される「着」が付着していることが関係しているが明らかである。つまり、(20)で事象成分を担うのは述詞「放」である<sup>(4)</sup>のに対して、(21)で事象成分を担うのは「放着」で、「V + α」フレーズである。このため、次の例が示すように、このような文では、Vの付着成分である「着」が欠けたり、あるいは他の要素と交替したりすると非文になる。

- (23) 桌子上 [放着] 一本书。  
 ?? 桌子上 [放Ø] 一本书。  
 ?? 桌子上 [放在] 一本书。

従って、両者は互いに違う事象の類型であり、このような違いをより明示的に、次のように示すことができる。

- (24) 他 [放] 在桌子上一本书。(彼は机に本を一冊置いた。)  
(25) 桌子上 [放着] 一本书。(机の上に本が一冊置いてある。)

ここまでは「+ $\alpha$ 」の有無によって、事象成分の類型に違いがあることを見た。「V+ $\alpha$ 」の場合、付着成分である「+ $\alpha$ 」の違いによって、事象類型が異なることもある。上では、「V+着」が表す事象は「保有」で、「有」を事象の担い手とする文と同義であることを見た。次の例で事象成分を担うのは「V+在」である、つまり、「+ $\alpha$ 」の部分が異なる。このような違いと連動して、事象の類型も異なり、＜存在＞事象となっている。これを裏付けるのは、このような文は以下の例が示すように、典型的なく存在＞事象の担い手である「在」を述語に持つ文と同義文関係にあるという事実である。

- (26) 那本书 [放在] 桌子上。 = 那本书 [在] 桌子上。  
那幅画 [挂在] 墙上。 = 那幅画 [在] 墙上。  
那辆车 [停在] 门前。 = 那辆车 [在] 门前。  
那几本书 [放在] 书包里。 = 那几本书 [在] 书包里。  
那个杯子 [拿在] 他手里。 = 那个杯子 [在] 他手里。  
主席团 [坐在] 台上。 = 主席团 [在] 台上。

(上の(22)に示した「V+着」を事象の担い手とする文と「有」を事象の担い手とする文が同義文であるとする主張と同様で、(26)に示している「放在」を事象の担い手とする文と「在」を事象の担い手とする文の同義関係も、両文の＜主体＞成分と＜客体＞成分の下位類型が同じであること（＜主体・所在者＞、＜客体・所在＞）を観察することで確認できる。詳細はここでは省略する。）

従って、「+ $\alpha$ 」が事象を担う言語単位の一部であり、「+ $\alpha$ 」の有無だけでなく、「+ $\alpha$ 」の異同によって、事象成分が異なることがある。このため、「+着」の場合と同様、これらの文に「+在」が欠けたり、「+在」が他の要素と交替したり



すると、非文になることがある。

- (27) 那本书 [放在] 桌子上。  
       ? 那本书 [放Ø] 桌子上。  
       ? 那本书 [放着] 桌子上。

このように、事象成分は単独の述詞によって担われている場合もあれば、述詞とその付着成分全体で担う場合もあるので、事象成分を担う言語学的単位について形式的に示すと次のようになる。

- (28) V+ ( $\alpha$ )

ここまでは、事象成分は単独の述詞によって担われることもあれば、述詞+ $\alpha$ の場合もあることを見た。上のようなケースとは逆に、述語に現れる述詞が同じ場合でも、文によって、担う事象の類型が異なることがある。次の2文はともに同じ「放着」によって事象が担われる文である、前者の(29)は「有」を事象の担い手とする文と同義で、〈所有〉事象である。後者の(30)は「在」を事象の担い手とする文と同義で、〈存在〉事象である。なお、両者の事象成分の違いはそれぞれの例が示すように、主体の実現はそれぞれ〈主体・所在〉と、〈主体・所在者〉となっていることで現れている。

- (29) 〈所有〉事象  
       [桌子上] 放着一本书。 = 桌子上 [有] 一本书  
       〈所在〉

(30) <存在>事象

[那本书] 在桌子上放着。 = 那本书 [在] 桌子上。

<所有者>

以上、この節で述べたことを整理すると、次のようになる。

述詞の類型がイコール事象の類型ではない。事象成分とそれを担う言語学的単位の関係も非対称性対応関係であり、同じ事象成分でも、それを担う言語学的単位が異なることがある、あるいは逆で、言語学的単位が異なっても、担う事象成分は同一であることがある。動詞の類型記述をもって事象類型の記述に代えることはできない。

3.2.5 意味成分類型の整理、意味成分の体系

ここまでは、意味成分には大きく主要成分である事象成分とそれ以外の従属成分である関連成分があることと、事象成分及び一部の関連成分（主体と客体）にはさらに下位類型があり、関連成分のなかで、下位類型が事象成分の類型によって相補分布関係を成しているもの（主体、客体）があることなどを観察してきた。このような重層構造を成している意味成分の体系を整理して、次のように示すことができる。

(31)

事象成分		動作	所有	存在	使成	使動	・・・
主体	動作者	○	—	—	—	—	—
	所有者	—	○	—	—	—	—
	所有者	—	—	○	—	—	—
	使動者	—	—	—	○	—	—
	使成者	—	—	—	—	○	—

客体	被動作者	○	—	—	—	—	—
	被所有者	—	○	—	—	—	—
	所在	—	—	○	—	—	—
	使成者	—	—	—	○	—	—
	使動者	—	—	—	—	○	—
着点		○	○	○	○	○	—
時間		○	○	○	○	○	—
場所		○	○	○	○	○	—
手段		○	○	○	○	○	—
・・・		・・・	・・・	・・・	・・・	・・・	・・・

### 3.3 文の意味的適格性に関する規定

関連成分には事象成分にとって「必需成分」と「任意成分」の違いがあることを見た。（言語学では記号学の用語を借りて、前者を「項argument」、後者を「付加詞adjunct」と呼ぶのが一般的なようである）。「必需成分」とは事象成分が必ず要求する成分のことで、その成分が欠けたり、または類型が異なったりすると、文の意味的完結性、意味的整合性が損なわれることになる。必需成分以外の成分は「任意成分」である。このように、事象成分には最低限満足させなければならない関連成分に関する規定があり、これらの規定は文の意味的適格性を保障するものである。

必需成分に関する規定には数と種類の2つの側面がある。前者は文の意味的完結性、後者は文の意味的整合性に関係する。また、必需成分の数と種類は事象成分の種類によって同じではない。

次の2つの文はいずれも1つの事象成分と2つの関連成分からなる文である。a文は特に不自然なところはないのに対して、b文は意味的完結性に関して問題がある。

- (32) a. 张三买了一本书。  
b. ? 张三放了一本书。

b文の意味上の問題は、必需成分が要求する必需成分が十分に充たされていないことである。「放」(置く)のような事象は、〈主体・動作者〉、〈客体・被動作者〉のほかに、被動作者が最終的「置かれる場所」という〈着点〉成分を必需成分として要求するのに対して、「放」を事象成分とするb文にはこの〈着点〉という成分が欠如していることが意味的完結性に不備がある理由である。従って、次のように、〈着点〉成分（〔(在) 桌子上〕）の補充が必要である。

- (33) 张三放〔在了〔桌子上〕〕一本书。

このように、事象成分の類型によって必需成分の数に違いがあり、a文の「买」のように、〈主体〉（「张三」）と、〈客体〉（「一本书」）の2つを要求する事象もあれば、b文の「放」のように、〈主体〉（「张三」）と〈客体〉（「一本书」）と〈着点〉（「桌子上」）の3つを要求する事象もある。事象成分はそれが要求する必需成分（項）の数によって、一項事象、二項事象、三項事象のように整理することもできる。次の文にある「走了」、「买了」、「放了」はそれぞれ一項、二項、三項事象の例である。

- (34) 张三走了。  
张三买了一本书。  
张三放在了桌子上一本书。

事象成分には必需成分の数に関する規定のほかに、類型に関する規定もある。次の(35)と(36)に含まれている意味成分の数は同じで、いずれも1つの事象成分と2つの関連成分からなる文である。(35)の2文は意味的完結性、意味的整合性に不備

がないのに対して、(36)の2文は意味不明である。

- (35) a. 张三有手机。 （張さんは携帯電話を所有している。）  
       b. 张三卖手机。 （張さんは携帯電話を売っている。）
- (36) a. ? 张三在手机。  
       b. ? 张三去手机。

(36)の2文の意味的不適格性の理由は事象成分と関連成分の意味的整合性にある。(36-a)の事象成分は「在」で、〈存在〉事象である。〈存在〉事象は必需成分として〈主体・存在者〉のほか、〈客体・所在〉を要求するのに対して、実際、〈客体・所在〉成分が置かれる位置に配置されている「手机」は当該意味成分（〈客体・所在〉）を担うのに不適切な語彙項目である。(36-b)の事象成分「去」で、〈移動〉事象である。〈移動〉事象は必需成分として〈主体・移動者〉のほか、〈客体・移動先〉を要求するのに対して、実際に〈客体・移動先〉成分が置かれる位置に配置されている「手机」も当該意味成分（〈客体・移動先〉）を担うものとして不適切な語彙項目である。このため、これら2つの文は言語話者にとって意味の理解が不能な欠陥文となっている。

事象成分の必需成分に関する規定のなかで、特に「類型」に関する規定の存在は、事象成分、及び主体成分、客体成分にそれぞれ下位類型があることを示すとともに、事象成分の下位類型と主体成分の下位類型の間にも、事象成分の下位類型と客体の下位類型の間にもそれぞれ「選択制限」があり、このような選択制限に基づき、事象成分の下位類型は自分自身の類型に合致した主体成分及び客体成分の下位類型を選択するようになっていることを示すものである。これらの制限が守られない場合は文の意味的整合性が損なわれ、意味上非文となる。次もこれらの制限が守られないことに起因する意味的非文の例である。

- (37) ? 桌子 [推了] 一把李四。  
? 一辆车 [停着] 我家门前。  
? 我家门前 [停在] 一辆车。

このように、必需成分の数と類型に関する規定は文の意味的適格性を保障するもので、言語話者が内的に持っている文形成に関する知識の一部であり、文形成記述の対象である。

なお、3.2.4では、事象成分の担い手は単独の述詞 (V) の時もあれば、「 $V + \alpha$ 」の時もあることを見た。このため、文の意味的適格性を保障する「項構造」というのもあくまで意味成分である「事象成分」の項構造であって、述詞の項構造分析をもってこれに代えることはできない。

### 3.4 意味成分の構成

意味単位としての文は意味成分の集合であることを見てきた。文形成に当たって、その第一歩は、伝達しようとする意味に基づき、意味成分の構成を決め、と同時に、意味成分を担う適切な言語学的単位を選び、それぞれに充てる必要がある。これによって、抽象的な意味成分は具体的な語やフレーズなどの言語学的単位として実現し、意味単位としての文が形成されるものとする。

文と文が互いに「意味」が異なることで「異なる文」と認識される。文と文の「意味」(「命題の意味」)の異同は意味成分の構成の異同を反映するものである。意味成分の構成は可能な文の数だけ類型があり、理論的には無限に可能である。意味成分の構成の多様性については、文を構成する意味成分の「数」と「類型」の2つの側面から見ることができる。

まず、文によって、含まれている意味成分の数は必ずしも同じではない。次はそれぞれ2つ、3つ、4つの意味成分から構成される文である、当然、それぞれが意味の異なる文である。

(38) [张三] [很累]。

[张三] [卖] [豆腐]。

[张三] [在菜市场] [卖] [豆腐]。

意味成分の数が同じであっても、類型が異なることがあり、よって、意味の異なる文となる。次の2例はいずれも4つの意味成分で構成される文だが、意味成分の類型は異なる。

(39) [张三] [在菜市场] [卖] [豆腐]。

[张三] [卖] [豆腐] 卖得 [很起劲]。

このように、意味成分の構成は可能な文の数だけあって、無限に可能である。一方、前述のように、文は事象成分の存在によって成立するもので、文には最低限事象成分が1つ、意味的に存在する。また、事象成分にとって、必需成分として最低限主体成分を要求する、従って、文には事象成分のほかに、あるいは事象成分が存在するがゆえに、その主体成分も1つ、意味的に必ず実在する。従って、最も単純な意味成分構成でも、最低限、〈事象〉成分とその〈主体〉成分という2つの成分が意味的に実在する。

異形同義文と呼ばれる現象がある。表層の形式に違いがあるものの、意味成分の構成（類型も、数も）同じである文のことである。話者の伝達意図（語用論的要因）、または情報構造（情報の新旧、焦点の所在）などの要因によって、形式上における意味成分の配置が異なったり、また、経済性の原理に起因する同一指示成分の省略などによって、一部の成分が表層の形式に顕現されなかったりすることもある、このため、意味成分の構成が同じでも、表層の形式が異なる異形同義文となるのである。次はこのような例である（劉・潘・故 1983）。表層の形式に顕現される意味成分の数、配置の仕方に違いはあるものの、命題的意味は等しいことが分かる。

- (40) 我去过上海, 我没去过广州。  
我去过上海, 没去过广州。  
上海我去过, 广州没去过。

3 文とも、次が示す同じ意味成分の構成である。

- (41) 去<事象・移動>  
过<過去の経験>  
我<主体・移動者>  
广州<客体・移動先>  
没<否定>

異形同義文とは逆の同形異義文の現象もある。同形異義文とは、意味成分の構成が異なるものの、同じく、語用論的要請、情報構造、あるいは経済性の原理の働きなどによって、実在する一部の成分が(省略され)表層の形式上に現れなかったり、移動が行われたりする結果、表層では同じ形式となって現れる2つ以上の文のことである。次は広く知られる同形異義文の例である、aとbの2つの意味解釈が可能である。(それ以上の意味解釈もできるとする考え方もある。)

- (42) 那个小孩儿追得我上气不接下气。  
Ⅰ. 那个小孩儿追我, 我上气不接下气。  
Ⅱ. 我追那个小孩儿, 我上气不接下气。

意味の異なる両文の意味成分構成はそれぞれ次のようになる。

- (43) Ⅰ. 追<事象・動作>  
那个小孩儿<主体・動作者>



我<客体・被動作者>

我+上气不接下气<結果>

## II. 追<事象・動作>

我<主体・動作者>

那个小孩儿<客体・被動作者>

我+上气不接下气<結果>

また、意味成分と形式成分（次節参照）の対応関係に基づき、意味成分が正しく形式成分に配置された両文の基本形式（原型）はそれぞれ次のようなものである。（[ ] の中は同一指示成分。）

(44) I. 我追那个小孩儿追得我上气不接下气。

II. 那个小孩儿追我追得我上气不接下气。

他方、実際の言語生活のなかでは、冗長性を避けるため、同一指示成分が存在する場合はその一方を省略したり（または代名詞などをもって代えたり）するなど、表層の形式上では再調整が行われる。具体的に示すと、次のようになる。

まず、同一指示成分の省略は「逆向」と「順行」の両方が可能である。(44-I)の場合、逆向省略では(45-a)または(45-b)の形式になり、順行省略では(45-c)の形式になる。

(45) [我] [追] 那个小孩儿 [追] 得 [我] 上气不接下气。・・・(49)

a. [Ø] 追那个小孩儿追得 [我] 上气不接下气。（同一指示成分消去、逆向）

b. [Ø] [Ø] 那个小孩儿 [追] 得 [我] 上气不接下气。（同一指示成分消去、逆向）

c. [我] 追那个小孩儿追得 [Ø] 上气不接下气。（同一指示成分消去、順行）

他方、(44-Ⅱ)に関しては、同一指示成分の逆向省略では(46-a)、順行省略では(46-b)となる。ただし、(46-b)の形では「那个小孩儿・・・上气不接下气」の意味に、つまり本来とは異なる意味となるので、採用されず、結果的逆向省略(46-a)のみが許される。

- (46) 那个小孩儿 [追] [我] [追] 得 [我] 上气不接下气。 . . . (50)
- a. 那个小孩儿 [Ø] [Ø] [追] 得 [我] 上气不接下气。 (同一指示成分消去、逆向)
- b. 那个小孩儿 [追] [我] [追] 得 [Ø] 上气不接下气。 (同一指示成分消去、順行)

上記のように、同一指示成分の省略による再調整の結果、明らかに、(45-b)と(46-a)が同形となっていることが分かる。つまり、同形異議文とは、形式上の制約による再調整の結果であり、表層形式の偶然の一致である。

### 3.5 意味成分と形式成分の対応関係、その記載先

前述のように、意味成分と形式成分の間に対応関係があり、このような対応関係に基づき、意味成分が形式成分に配置され、両者が結合し、表層では位置、意味機能、及び品詞類型の情報を持つ「統語成分」を得るに至る。このため、言語話者が内的に持っている文に関する知識のなかにはこうした意味成分と形式成分の対応関係も含まれており、文形成記述の対象である。一方、対応関係は意味成分と形式成分の両方に関係する情報であるので、意味成分側と形式成分のどちらかに記載されていると思われる。

形式成分側から見て、形式成分と意味成分の対応関係は基本的には1つの形式成分に複数の意味成分が対応する「1対多数」の非対称性対応関係である。これにはさらに「数」と「類型」の2つの側面がある。

まず、数の面では、すでに見てきたように、形式成分には、1つの形式成分内に1つの意味成分を収納するという「1対1」の対応関係もあれば、2つ以上の意味成分が一つの形式成分内部で共起可能な「1対多数」の対応関係もある。中

国語では、前者の例として、述語、主語、目的語、補語(47)などが挙げられ、後者の例としては状語(48)が挙げられる。

(47) 1 対 1

主語： [张三] 卖豆腐。

述語： 张三 [卖] 豆腐。

目的語： 张三卖 [豆腐]。

補語： 张三卖过 [三年] 豆腐。

(48) 1 対多数

状語： 张三 [每天下午/在菜市场/替他父亲] 卖豆腐。

次に、類型の面では、意味成分の構成は文によって異なる、そのため、同じ形式成分に対応する意味成分の類型も文によって必ずしも同じではないことがこれまでのなかで見てきた。例えば、「主語」という形式成分に対応する意味成分の類型は事象の類型によって、次のように<動作者>、<所在>、<所在者>と交替する。

(49) [张三] 做豆腐。 動作事象、主語「张三」＝<動作者>

[张三] 有一辆跑车。 所有事象、主語「张三」＝<所有者>

[张三] 在二楼。 存在事象、主語「张三」＝<所在者>

このため、類型の面から見ても、形式成分に対する意味成分の対応関係は基本的に文によって（より厳密には「意味成分の構成によって」）異なるという「1 対多数」の（1つの形式成分に対して複数の意味成分類型が対応する）対応関係である。このように、数の面でも、類型の面でも、形式成分に対する意味成分の対応関係は基本的に「1 対多数」の対応関係が存在するため、両者の対応関係が

形式成分側に記載されているものと考えer場合、一つ一つの形式成分に対して、対応する意味成分の類型をすべて整理し、漏れなく列挙する必要がある。例えば、「状語」には、「様態、程度、場所、時間、相手」など、さまざまな意味成分が配置されるので、「状語」については次のように、それに配置しうるすべての意味成分を整理し、リストアップする必要がある。

(50) 状語に対応する意味成分

数：  $1 + \alpha$  {様態、時、場所、協働者、相手、手段、・・・}

類型：  $1 + \alpha$  {様態、時、場所、協働者、相手、手段、・・・}

加えて、意味成分の実現が事象成分の類型と連動し、意味成分の類型によって交替することがあるため、こうした事象類型との連動関係（あるいは分布）も明記しなければならない。例えば、「主語」に配置される〈主体〉成分の場合、動作事象ならば〈動作主〉、所有事象ならば〈所有者〉、存在事象ならば〈存在者〉のように。

(51) 主語に対応する意味成分

数： 1

類型：  $1 + \alpha$   $\left\{ \begin{array}{l} \text{動作者（ただし、事象成分が動作）} \\ \text{所有者（ただし、事象成分が所有）} \\ \text{所在者（ただし、事象成分が所在）} \\ \text{・・・（ただし、事象成分が・・・）} \end{array} \right\}$

このような記述は理論的に可能であっても、現実的には「意味」の問題であるだけに、相当困難な作業となることは想像に難くない、また、列挙し尽くせる保証もない。いわゆる「統語成分分析」の記述も基本的にはこのような、形式成分に立脚したアプローチである。すでに見てきたように、多くの文献では、各々の

「統語成分」について、その「意味類型」の列挙に多大の労力を費やしていることは窺える、にも関わらず、そのリストが十分なものか否か、また、それぞれの「意味類型」の実現に事象類型の条件があるか否か、あるならばどのような条件が不明な場合が多いため、結果的に、断片的な事実の羅列に留まっている印象で終わり、文形成の説明に寄与しない理由である。

対して、もう一方の意味成分の側から見ると、ある1つの意味成分が対応する形式成分の類型は相対的にシンプルで、基本的に「1対1」の関係である。例えば、形式成分の「状語」側から見て、自身に対応する意味成分に〈時〉、〈場所〉、〈手段〉、〈相手〉など、さまざまあり、すべて列挙するのが困難であるのに対して、〈時〉や〈場所〉、〈手段〉、〈相手〉といった意味成分側から見ると、対応する形式成分は「状語」のみである。また、〈主体〉成分の下位類型である〈動作者〉や、〈所有者〉、または〈所在者〉についても、その実現の事象類型条件がなんであれ、対応する形式成分は「主語」であることには変わりはない。従って、次のように、いずれも1対1の対応関係として記述されることになる。

- (52) 〈 時 〉：状語  
 〈 場 所 〉：状語  
 〈 受益者 〉：状語  
 〈 動作者 〉：主語  
 〈 所有者 〉：主語  
 〈 所在者 〉：主語  
 . . .

このように、形式成分側よりも、意味成分側が両者の対応関係の記載先であったほうが、言語話者にとってはるかに記憶上の負担が小さいことが分かる。また、同じ理由で、記述においても経済的で、合理的である。従って、意味成分に記載されている情報は2つあり、一つはそれ自身の意味機能と、もう一つは形式成分

との対応関係である。概念的に示すと、次のようになる。

(53) 张三在菜市场卖豆腐。

(54) 卖：①<事象・動作>、②述語

张三：①<動作主>、②主語

菜市场：①<場所>、②状語

豆腐：①<客体・非動作者>、②目的語

なお、上では意味成分の形式成分に対する対応関係は「基本的に」1対1であると述べた、これは、一部では2つ以上の形式成分に対応する意味成分もあると見受けられる現象が存在するからである。<被動作者（客体）>がこのような意味成分である。事実として、<被動作者（客体）>は次のように、「目的語」に配置される場合(55)と、「状語」に配置される場合(56)がある。

(55) 张三送到了机场 [几个客人]。

张三打碎了 [一个杯子]。

(56) 张三把 [那几个客人] 送到了机场。

张三把 [那个杯子] 打碎了。

中国語の標準的な配置では、<被動作者>が述語の右側にある目的語に対応することは周知の事実である。

(57) 张三卖豆腐。

张三有一辆跑车。

张三在二楼。

(58) 张三送到机场几个客人。

张三打碎了一个杯子。

本来このように述語の右側（目的語）に配置する＜被動作者＞を述語動詞の左側にある状語に配置するには2つの条件が課されている。一つは意味成分構成上の条件で、もう一つは意味成分の情動的価値の条件である。

まず、意味成分構成上の条件として、上の(58)、及び次の(59)のように、＜被動作者＞（「客人」、「杯子」）成分のほかに、＜結果＞成分（「到了机场」、「了」）が1つ存在することが要求される。(60)のように、＜結果＞成分が不在の場合、＜被動作者＞の状語への配置は許されない。

(59) 张三 [把几个客人] 送 [到了机场]。

张三 [把一个杯子] 打碎 [了]。

(60) \*张三 [把几个客人] 送 [∅]。

\*张三 [把一个杯子] 打碎 [∅]。

次に、上記のような＜結果成分＞と＜被動作者＞が共起する意味成分構成では、標準的な配置として、＜被動作者＞も＜結果成分＞も述語動詞の右側に配置される成分で、互いの位置関係は＜結果・着点＞＋＜客体・被動作者＞であるが、一方、このような場合は、目的語に配置する＜客体・被動作者＞は(61)のように、数量詞が付くなど、[－旧情報]の指定を受ける成分でなければならないという制約がある。(62)のように、指示詞「那～」(あの～)が付くもの（「那几个客人」）や、特定の人やものを指す名詞（「他妹妹」）など、既知の情報で、つまり[＋旧情報]の指定を受ける成分は不適格となる。

(61) 张三送到了机场 [几个客人]。

张三打碎了 [一个杯子]。

(62) ? 张三送到了机场 [那几个客人]。

? 张三送到了机场 [[他妹妹]。

このため、〈客体・被動作者〉が [+旧情報] の指定を受ける後者(62)の場合は、次の (63-b)、(64-b) ように、これを述語の左側にある状語への配置転換が要求される。(便宜的に生成文法の表示法を借りて、本来の配置位置を *t* (trace、痕跡) と表示する)

(63) a. ? 张三送到了机场 [那几个客人]。

b. 张三 [把那个客人] 送到了机场 [*t*]。

(64) a. ? 张三送到了机场 [他妹妹]。

b. 张三 [把他妹妹] 送到了机场 [*t*]。

このように、2つの形式成分に対応しているように見える〈客体・被動作者〉だが、基本的には目的語に対応する意味成分で、状語との対応関係は条件付きで、意味成分の「情報価値」と関係があり、有標 (marked) である。情報構造上の要請によって配置の転換が行われた結果として状語の位置に現れるものと考えられる。整理して次のように述べることができる。

(65) 〈被動作者〉の状語への配置転換

〈被動作者〉とく結果〉が共起する意味構造で、〈被動作者〉が旧情報である場合は、これを一番右側の目的語に配置することはできず、左側の状語へ配置を移動する。



なお、このような配置転換は根本的にはく結果＞成分の焦点化によって動機づけられるもので、個別言語の情報伝達の原則を反映するものだが、本論の主旨とは離れるテーマになるので、詳細は他の機会に譲りたい。

### 3.6 小結

本篇の主旨は次の通りである。

文は意味の面では意味の単位である。意味の単位としての文はより小さい意味成分から構成され、構造がある。意味成分はいずれも何らかの意味機能をもっており、文全体の意味の形成に機能する。意味成分のなかで、事象成分は主要成分で、その他の成分は事象成分との意味関係によって結ばれる関連成分である。事象成分の意味機能はそれ自身の語彙的意味範疇によって決められるのに対して、関連成分は事象成分との間に意味関係が生じることで意味成分となり、その意味機能もこのような事象成分との間に意味関係によって定義される。文は主要成分である事象成分を中心に、1つ以上の関連成分から構成される。関連成分にはまた事象成分が必ず要求する必需成分と、それ以外の任意成分の違いがある。事象成分の類型によって、必需成分の数と類型に関する規定があり、必需成分の数と類型の規定は文の意味的適格性を保障する。意味成分の構成類型は文の数だけあって、無限に可能である。文と文の意味的（命題的意味の）異同は互いの意味成分の構成の異同を反映するものである。

意味成分にはそれ自身の意味機能に関する情報のほかに、形式成分との対応関係の情報も記載されている。このような対応関係に基づいて、意味成分が形式成分に配置され、形式上、「その内部に意味成分が収納される形式成分の連続」、つまり「統語成分」として現れる。伝統文法でいう「統語成分」はまさにこのような「内部に意味成分が収納された形式成分」、つまり意味成分と形式成分の結合体のことである。

\* 査読者の方には丁寧にお読みいただき、著者によるいくつかの初歩的ミスをご

指摘いただきました、心から感謝いたします。

## 注

- (1) 桌子上放着一本书。
- (2) 那本书放在桌子上。
- (3) 他放在桌子上一本书。
- (4) このような文に関して、述語が「放在」であるとする解釈が一般的である。「在」はそれに後続する名詞成分（「桌子上」）と連動して起きる成分で、また、後続する名詞成分の意味機能が変わると、当該成分の類型も「在、到、进」のように交替することから、本論はこれを「前置詞的成分」と解釈する立場である。詳細は第2部「中国語の文形成」を参照されたい。

## 参考・引用文献

### (一)

- 北京大学中文系现代汉语教研室（編）2004《现代汉语》商务印书馆
- 丁声樹 1961：《現代漢語語法講話》 商務印書館
- 馮蘊澤 2003：〈现代汉语单句生成的理论模式〉《文学・言語学論集》9-2 熊本学園大学
- 何元建 2007《生成语言学背景下的汉语语法及翻译研究》北京大学出版社
- 黄伯荣・廖序东 1991《现代汉语》高等教育出版社
- 黎錦熙 1933《新著国語文法》 商務印書館 1992
- 林祥楣 1991《现代汉语》语文出版社
- 刘月华・潘文娛・故韡 1983《實用現代漢語語法》外语教学与研究出版社
- 钱乃荣（編）1995《汉语语言学》北京语言学院出版社
- 沈阳・冯胜利 2008《当代语言学理论和汉语研究》商务印书馆
- 沈阳・郑定欧 1995《现代汉语配价语法研究》北京大学出版社
- 袁毓林 1998《汉语动词的配价研究》江西教育出版社

趙元任 1980《中國話的文法》丁邦新譯 香港中文大學出版社

朱德熙 1995『文法講義』白帝社

（二）

チャールズ J・フィルモア 1975『格文法の原理』（田中春美、舟城道雄 訳）三省堂

井上和子・原田かづこ・阿部泰明 1999『生成言語学入門』大修館書店

影山太郎 1996：『動詞意味論』くろしお出版

柴谷方良・影山太郎・田守育弘 1982『言語の構造—理論と分析—』くろしお出版

柴谷方良 1978『日本語の分析』大修館書店

小泉保 2007『日本語の格と文型』大修館書店

神尾昭雄・高見健一 1998：『談話と情報構造』大修館書店

池上嘉彦 1975『意味論』大修館書店

中右 実・西村義樹 1998：『構文と事象構造』大修館書店

中右 実（編）1998『格と語順と統語構造』研究社出版

中村捷・金子義明・菊地朗 1989『生成文法の基礎』研究社出版

鳥井克之 2008『中国語教学（教育・学習）文法辞典』東方書店

福地肇 1985：『談話の構造』大修館書店

北川義久・上山あゆみ 2004『生成文法の考え方』研究社

馮 蘊澤 2015：「補語・補語構文の構築」『文学・言語学論集』22-2 熊本学園大学

馮 蘊澤 2021：「文形成の深層・中国語の文形成（一）」『文学・言語学論集』28-2 熊本学園大学

## 内 容 提 要

句子由语义和形式两个平面构成，在语义的平面上，句子是一个语义单位。作为语义单位的句子由两个以上的语义成分组成。组成句子的每个意义成分在句子中都承担有一定的语义功能，读者或听者通过正确读解句子中每一个语义成分的语义功能来理解整个句子的意义。语义成分之间有中心成分和附属成分之分。一个句子中最低需要包含一个〈事态〉成分。〈事态〉成分是句子的中心成分，其他成分均属于从属于中心成分的附属成分。〈事态〉成分的语义功能取决于其自身的词汇意义范畴。〈事态〉成分以外的语义成分和〈事态〉成分之间存在着一定的语义关系，其语义功能反映的是这种语义关系、因此，和〈事态〉成分不同，〈事态〉成分以外的语义成分的予以功能取决于其自身与事态成分之间的语义关系。中心成分与附属成分通过这种语义关系放射性状地连接在一起，组成一个完整的语义单位。事态成分在其附属成分的数量（即“价”）及类型方面有一定的规定性，一个意义上合格的句子需要满足事态成分的这两方面的规定。组成一个句子的语义成分的数量和类型在理论上可以有无数。句子之间的（命题）意义的异同反映的是组成句子的语义成分的数量和类型的异同。语义成分除了包含有其本身的语义功能方面的信息外，还包含有与形式成分之间的对应关系方面的信息，根据这种信息，语意成分投放在形式平面上与其相对应的形式成分上，形成表面层次上所显现的“语法成分”。